地球上における終焉は非常に無機質なものであった。

（一日目）　人々は何気ない体験をする。例えば買い物での事、普段は愛想よく接客するはずのレジのおばさんが、一言もしゃべらず無愛想であった。しかし、人々はこういったことをほとんど気にとめなかった。

（二日目）　さらに何気ない体験は続く。駅までの道を、通りすがりの人に尋ねようとした人は、誰もが彼の声に耳を向け立ち止まることさえしないことに気付いた。そのようなことがいたるところで起きていたわけであるが、人々は、最近の人間は冷たいという結論を出しただけで、それ以上のことは考えることはしなかった。

（三日目）　次は、人々が長い時間にわたって身を寄せる場所、それは時に学校であったり職場であったりするわけだが、そういった場所で人々は違和感を覚えることとなった。例えば学校では、教師と生徒との間で全くコミュニケーションがとられなくなったのだ。そうは言っても授業は行われていた。それは一方通行のものではあるが。

（四日目）　それらの場所における変化はさらに大きなものとなった。再び学校での話を例にとって見ると、今度は生徒同士、教師同士でのコミュニケーションの変化が見られたのだ。普段なら、会えば挨拶ぐらいはする知り合いにあっても、無視されるのだ。それでも親しい間柄の友人とは、談笑していたのでそれほど心配することはなかった。

（五日目）　さすがに人々は、この異常な事態に不安を感じ始める。それもそのはず、昨日までごく普通に笑いあったり、ふざけあったりしてきた、親しい友人が、自分と全くコミュニケーションをとろうとしないからだ。いつもと変わらずそこに存在しているのだが。

（六日目）　自らが心の内をさらけ出せるのはここぐらいだ、人々はそう思い、自分の家に、自分の家族に、安らぎを求める。しかしそれも今となっては叶わぬものとなってしまった。家の中には、すでに赤の他人となってしまった物体としての『人』しか存在しなかった。それでも人は、ただ一人だけコミュニケーションを取れる相手がいた。愛すべき人である。この日はずうっと、二人でこの異常事態について語り合った。そして、明日も、それからもずうっと変わらぬままいることを互いに誓い合った。そしてその日は終わろうとしていた。

（七日目）　昨日の誓いは守られることはなかった。そして、自らのコミュニ

ケーションの対象となるものは 0 となった。

人と人とのつながりという網の目をことごとく断ち切った状態、人間自体は昔と変わらず存在し続けているのであるが、その個々が互いに全く関わりを持たない状態、それがすべての終わりであった。

やがて人は、孤独という閉塞感に打ちのめされていくことになるであろう…

財満 康太郎

「部屋の外」

土曜夜、翌日は日曜で学校が休みなので、自分の部屋で、夜遅くまでおきて、量子論についての本を読んでいた。その本には、コペンハーゲン説という不思議な量子の世界に対する解釈の１つがあった。その説によると、観測されていない状態では電子は波として広がっており、観測されると、電子は観測された点に収縮するというのだ。シュレディンガーの猫という例え話もあげられていた。その話では、１匹の猫と、毒の入っているいつ破裂するかわからないビンを、外と遮断されている密閉された箱の中に入れる。箱の外からは箱の中が見えないので、外からは猫が生きているか死んでいるかは箱を開けてみるまでわからない。ある時間が経過した後に、外の人間が箱を開けて中をみる。その開けてみた時、初めて、猫が生きているか死んでいるかが定まり、その箱を人間が開けるまでは、猫の生きている状態と死んでいる状態とが重なり合っていて、定まらないというのである。

ここで、本を読むのを一休みして、私は考えた。今は、夜で、外の世界と私の部屋はカーテンで仕切られ、私には部屋の外の世界は見えない。今、量子の世界と同じようなことが外のこの世界でもおきていて、外の世界もいくつかの状態が重なり合い、ゆらいでいることだってありうるのかもしれないな、と思った。でも、もしそのようなことが私に見えない部屋の外で実際におきていたとしても、私にはその状態をみることができない。私がカーテンを開けて外を見た瞬間には、外の世界は何事もなかったかのようにいつもの世界に収縮しているのだから。こうしている間にも、外の世界は、ゆらゆらと揺らぎ、私がカーテンを開けて外をみると、外の世界は、ある１つの状態に収縮する。そして、私がカーテンを閉じると再び、外の世界は揺らぎ始める。また、再びカーテンを開けると収縮する。その繰り返しの世界。そんな世界だって、ありうるなと思った。そんなことが絶対にないとはいいきれない。外の世界には自分以外にもたくさんの人がいて世界を見ているのだから、そんなことが起きていたら、誰かが気づくはずだと言うかもしれない。でも、この私の部屋のように、それぞれの人は自分が見ることのできる空間をもっていて、それぞれの人も、その空間の外のものは見ることはできない。やはり、誰もその自分に見えない空間で何が起きているかわからないし、見えないところでは、実は、とんでもないことになっているかもしれないのである。

そんなことを考えているうちに、部屋の外がどうなっているか不安になり、カーテンをあけてみることにした。（どうせ私がカーテンをみたときには、外

の世界はいつもの世界に収縮しているのだから、無駄だとはおもったけれども。）思ったとおり、いつものとおり人気のない家の前の通りが街灯に照らされていた。少し安心して、カーテンをしめた。

そろそろ、もう疲れたので、今日は寝ることにした。時計を見ると、2時20分であった。かなり疲れていたようで、布団に入るとそのまますぐ意識がなくなった。

日曜日、朝、9時30分に目がさめた。自分が昨晩何を考えていたかもすっかり忘れていた。自分の部屋からでて、家族のいる居間へ行こうとして廊下に出た。すると、うちでは飼っていない黒い猫が廊下にいる。しかも、一匹でなくて、十数匹とうじゃうじゃといる。廊下にある本棚の上ですやすや寝ているものや、床からこちらを見上げて今にもこちらに跳びかかろうとしているものなどがいる。こんなものは、もともと、うちにはいないので、あわてて、家族のいる居間のあるドアのところまでいった。そして、猫が居間へ入ってはいけないから廊下に閉じ込めておこうと思い、さっとドアをあけて自分が居間に入るとすぐにドアをしめた。居間では父が新聞を読みながらトーストを食べていたので、黒猫がたくさんいると言って、ドアをあけて、父をひっぱって急いで廊下に連れ出した。すると、なんと、あれだけたくさんいたはずの猫があとかたもなく、いなくなっている。猫の黒い毛も一本もない。父とふたりで、どこをさがしてもいない上に、逃げたような隙間などもないので、父に寝ぼけたのだろうといわれて、あきらめて、居間へ戻った。しっかり、逃げないようにドアも閉めたのだし、見ていない間に本当にどこに行ったのだろうと思いながらも、逃げたところもなかったので、やっぱり、寝ぼけていたのだろうかと思うことにした。その日は、そのあと、何事もなく、1日が過ぎた。

月曜日、朝、一時間目から授業があるので、7時に起きて、家をでた。新宿で中央線から山手線に乗り換えて、渋谷へ向かった。渋谷で降りてみると、変なことに気が付いた。降りて、乗ってきた電車の方をみると、電車の色が紫色なのである。乗った時には気が付かなかった。周りの人は特に気にしている様子はない。私が電車の中にいる間に電車が塗り替えられているはずがないし、新宿で乗るときにどうして気が付かなかったのだろうと思ったけれども、急いでいたのでそのまま学校へ向かった。昨日に引き続いて、最近、朝は寝ぼけているようだ。

火曜日、今日も寝ぼけたようなことが起きた。休講で午後は授業がないので、学校の食堂で昼食をとった後、家に帰った。食後で眠くなったので、昼寝をすることにして、目覚し時計を1時間後の3時にセットして自分の部屋のベッドで寝た。そのはずだったが…、それなのに、目を覚ましてみると学校の空い

た教室に一人で寝ていたのである。最初は学校にいる夢かと思ったが、机の感触、みためがあまりに本物そのものであったので、今、学校にいる自分が本当なのだと信じざるを得なくなった。時計をみると2時30分であった。教室を出て、掲示板を見にいくと、休講の掲示があり、休講のほうは夢ではなかったらしい。しょうがないので、再び、家に帰ることにした。せっかく、家に帰ったはずなのに面倒だなと思いながら、電車に乗った。電車の扉の横のところに寄りかかって、目を閉じながら、このまま寝て目を覚ましたら家の自分のベットに寝ていることがあればいいのにと思った。でも、そんなに現実は甘くなく、再び目を開けたときには、同じ場所で電車のドアのところに寄りかかっていた。

水曜日、5時間目まで授業があり、それから、本を見に、渋谷の紀伊国屋によることにした。紀伊国屋はビルの5階にあるのでエレベータにのった。最近、変なことが起こりすぎるな、疲れすぎているのかな、睡眠時間を増やさなくてはいけないのかなと思っているうちにエレベーターの中が一瞬暗くなった。停電かなとかそうこう思っているうちに扉が開いた。でも、ついたのは地下1階で、5階ではなかった。またか、最近、寝ぼけているから、また、ボタンを押し間違えたのだろうと思って、エレベーターに戻り、5階のスイッチを押した。

木曜日、最近、いいかげん、変なことや面倒なことがおきるのでいやになり、昨晩は早く寝た。だから、今日は何も起こらないだろうと思ったら、ささいなことではあるけれど、トイレから出ると、思っていたのとはちがう建物にいたり、教室に置いてあったはずのカバンが目をはなしたすきにサークルの部室に勝手に行ってたりすることが何回もあり、変なことの起こる回数が減るどころか増えている。そのせいで、授業に遅れるようなこともあり、授業の直前には教室の席から離れない、カバンを抱え、目を離さないなど徹底するようにした。

学校以外では、昨日の教訓を生かしてエレベーターに乗らず、エスカレーターを使うなど気をつけるようにした。それでも、次々と思いもよらないところで変なことが起き続けた。

金曜日、日常的に起きる変なことについては、もう、どうしようもないので、もうあきらめることにした。こういう変なことはながく続くものではない、もう少しすれば、こういうことは過ぎ去ってなくなるだろうと自分にいいきかせて生活をした。なんとか5時間目まで、授業がおわり、学校をでた。

帰りながら考えた。ここのところ、自分の身の回りに起こることはめちゃくちゃであるけれども、どうも自分の見ていないところ、見えないところで予

想もつかないことが起こるらしいということはわかってきた。見えない電車の外側、見えないエレベーターの外、目を離したすきに消えるカバン。しかも、だんだん短い間だけ、目を離しただけでも変なことがおこるようになっている。これ以上、短い時間で変なことが起きていくと考えると怖い。そうしたら、まばたきするだけでいろいろな変なことがおきてしまう。このままだと、今夜あたりにはそんなことがおきてしまうかもしれない。まばたきするのに目をつぶるだけで、次の瞬間に目をあけたときには自分のいるところは予想もつかないところになっている。そういうようになるのかもしない。いろんなところに歩かずにいけるし、目を開けてからのお楽しみになるから飽きなくてよいと考えることもできるが、行き先は選べない。まばたきしたすきに、とんでもないところに行っているかもしれない。それこそ、目を開けた瞬間に車の行きかう高速道路のまんなかに寝転がっていたらもうおしまいである。どうしようもない。そんなことがおきたら … 。

ひとまず、なんとか家にたどり着いた。やはり、変なことが起きるまでの時間は短くなり、予想のとおり、まばたきするだけで、自分のいる場所が移動するようになってしまった。まず、家の部屋にいたはずが、まばたきすると駅にいて、次には学校の誰もいない暗い教室、そして、家に戻ってきた。これまでは何事もなかったが、次こそ危ないことになってしまうかもしれない。これからは気をつけないといけない。だからって、目を開きっぱなしにしているわけにはいかない。目が乾燥してしまう。だから、両目、いっぺんにつぶらずに、片方づつ目をつぶるのである。そうこう考えているうちに、無意識のうちにいつもの習慣で両目をつぶってしまった。怖くて、目を開けることができないまま、時は過ぎていく。

月曜日。
私も今日で80才、老後は静かなところで絵でも書いて暮していこうと思っている。というわけで最近は風景がきれいな富士山の麓の一軒家に引っ越してきた。そこで早速キャンバスに向かい目の前の風景を書き始めた。

火曜日。
今日はあめが降っていたので家にいたが、このとき妙な男がやってきた。その人はまだほとんど書いてもいない私の絵を高値で買おうと言って来た。どこでそんなことを知ったのでしょうか。私がまだできあがってないというとその男はそれまでここで待つという。私は追い返してはいけないような気がしてきたのでそのままいっしょに住むことにした。

水曜日。
きょうは晴れたので外に出てみようと思いドアを開けようとしたが何かにつかえてドアが開かない。仕方なく窓から外に出てみると家の周りにびっしりと木が植えられていて、ドアも木につかえて開けられなくなっているようである。出入りするにはこの窓を使うしかないようである。昨日やってきた人は床に穴を掘って、そこから出入りしているようで、なかなかのアイデアだと思ってしまった。家の周りは見渡す限り森林である。富士山はみられなくなってしまった。ペンギンや、極楽鳥など世界中の鳥がそこにいた。今度はその鳥たちの絵を描こうと思った。

木曜日。
きょうは朝から火曜日に来た男が家を上空に向かって増築している。家は塔のようになっていた。そういえば、私が使っていた絵の具のチューブと、様々な工具とを交換していた。そこに上っていくと、久しぶりに富士山をみることができた。そうして、ようやく絵を描き終えて下に戻ると大量のはとが住み着いていてはいることができない。しかし、はとが出入りしていた穴は、今書いていた絵を張り付けることで塞ぐことができた。

金曜日。
家のなかが非常に騒がしい。いつのまにかたくさんの人が住み着いている。床にたくさんの穴が開いていてそこから出入りしているようだ。その人々に話を聞くと国境線の下を潜り抜けてきたらしい。これだけの人数は家にはいらないと思っていたが、その人々はそれぞれ私が昨日書き終えた絵が描かれたキャンバスを持っており、それを組み合わせて次々と家を上に拡張していった。これなら全員住めそうである。

土曜日。
外を見渡してみると家の周りにも大量の人々がいることに気付いた。その人々ははっきり二通りにわけられる。一方はその場で全く動かない。そこに様々な鳥が止まり巣をつくっている。もう一方は、常にまっすぐ歩いていて止まらない人々である。火曜日に来た男は使い古したチューブとどんなものでも交換してきた。唯一交換できないものは、この世で最も高価な、新品のチューブであると言う。私も何か面白いものと交換してみようと、床に開いた穴の中に入ってみることにした。穴の中はあざらしがたくさん横たわっていて足の踏み場もないほどで、出口まで歩いて１日ぐらいかかるらしい。

日曜日。
まだ穴の中を歩いている。見当たるのが小さいアザラシばかりになってきたので、もうすぐ出口のような気がする。穴は砂漠のような所へつながっていた。そこから出るとすぐに砂で埋まってしまった。そこには使い古したチューブが山積みになって塔のようになっていた。振りかえると、自分が住んでいたキャンバスの塔に火が灯り世界の中心のように夜空を照らしていた。足元には昔自分が使っていた電話があり、受話器を取ると、そのチューブの山の写真を早く撮って持っていくようにといっている。そういえば、その写真の締め切りを一週間も過ぎていたことを思い出した。わたしは砂漠の中、会社にいくため、巨大なビルの蜃気楼に向かって走っていった。

◇月曜日
君が神になる‥‥『THE WORLD』‥‥プレー・ステーション‥‥

「私、あなたの他に好きな人ができたの、ごめんなさい‥‥あなたが悪いわけじゃないの、私が一方的にいけないんだけど、もう、どうしようもないの‥‥別れて下さい‥‥」

◇火曜日
マサオは学校から帰ってくると、ただいまも言わないで、またゲームだ。昨日買ってもらったあのゲームを、クラスで一番にクリアしようと。

◇水曜日
昨日、僕はふられた。あるいはそれは、おとといだったのかもしれない。覚えているのは、3年間もつきあってた彼女を、小学校5年のアホガキなんかにとられた、ということだけだ。ああ、だからあいつ、デートよりカテキョウのバイトを優先させてたのか‥‥

◇木曜日
「おーい、マサー、おまえ、ワールドどんくらいまでいった？」
「「眼」はもう楽勝、地上5mくらいまで降りれて、歩いてる人の顔がちょっと分かるくらい」
「なにー、じゃ、「耳」は？」
「「公園」の「コンサート」から「歌」が聞こえた」
「やりー、おれなんて、「部屋」の「ラジオ」までちょっと聞こえたぜ！」
「うっそ ?! 」
「「ラジオ」の「番組」、キーポイントの1つらしいぜ」
「うおー、いいなー、学校帰ったら、家行っていい？教えてよ」

コロス‥‥

◇金曜日
今日、僕は早起きした、まだ5時、昨日の夜に思いついた計画で興奮してうまく寝れなかった、というのが正直なところ、順番を決めておこー、いえーい、飛行船を手配してー、ハロゲンランプ2万個注文してー、えっと、バッテリー、どのくらい要るのかなー、銀行にあるやつだけで、お金、足りっかなー。

◇土曜日
「はい、もしもし」

「あ、＊＊さん？航空宇宙研の〇〇ですけど、今どこにいるんすか？」
「え、家」
「なにやってんすか、もうすぐ実験始まりますよ、チーフが遅れてどうすんすか？」
「あ、おれ、しばらく休むから、なんか腹痛い、あと頼むよ」
「え、ちょっ、なに言ってんすか」
プチッ
「電源切っとこ、ったく、こっちも忙しいっつうの、ウフフ」

「もしもし、かわりました、マサオですけど」
「あ、マサー、おーっす、ワールドの裏ワザ見っけたぞ、日食出せるやつ」
「うっそ！どうやるん？」
「＠＄▽￠」「○◎♂▽」「〒→○△‥‥」「ゝ※□◇♀‥‥」
「それ今日しかけとけば、明日出せっから」
「ありがと、速攻やってみるね」
「かなり、人の「平和」がUPするよ、じゃ、また」
「うん、ありがと、じゃ、また」
カチャ
「よっしゃー、日食ー」

◇日曜日
もうすぐ始まる皆既日食を見ようと、通りでは、多くの子供が黒いガラスを手にして、顔を上に向けている。そこにキラキラ光る飛行船が、雲一つない青空をスーと横切‥‥

マサオは朝からパジャマ姿のままコントローラーを握る。「眼」の高度を下げる。通りがゴチャゴチャしているのを見て、日食のプログラムがうまくいったことを知り、にやにやと目が線になる。自分も日食を見ようと「眼」を180°回転させ、とそこでマサオの丸くなった目の瞳孔が固定して、
「5‥‥4‥‥3‥‥2‥‥1‥‥GO！」飛行船から真っ赤な閃光が雷のようにパッと放たれる。消える。また光る。消える。あ、また。飛行船の点滅、というより、空の点滅は止まらない。
REDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUERED
BLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUE
REDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUEREDBLUE...

「ウヒヒヒヒ、ザマーミロッ‥‥クソガキはみんな死ぬんじゃ(沈黙)」

朝ご飯ができても食べに来ないマサオをゲームから引きはがすため、母親は

マサオの部屋のドアを開けると、マサオは背中を丸め、手足を震わし、口から泡を吹いていた。音にならない声で息子の名を叫びながら、倒れこむように駆けよる母親はバキャッ気づかずプレステを 65kg の体重をかけて踏みつけたブツッ、ブーンもう何も、テレビスクリーンには映らない (沈黙)

おわり

と、これでは黒いので、つづき。

◇後日
「マサー、ごめんな、退院したらおれのデータ分けてやっからさ、許して、おれの世界さー、なんかオレっちくらいの男子と大人のおねーさんとのカップルが流行っちゃってさー、いいと思わねー？」「ゲームに入りたいよなー」「うわっ、エローい」「おまえの方が先に言ったんじゃんかよー、エッチー」「ギャハハハ」「アハハハ」
窓の外には、壊れない世界の透き通るような青い空がみだされることなく、いつまでもどこまでも広がっているのだ。

一日目

特に変わった事の無い日常生活。
変わった事といえば、体重がたった一日で
5kgも軽くなった事ぐらいだった。

二日目

自分を含めた周りの人達の見た目の異常に
気づき始めた。正面姿や後姿はこれといって
変化は無いのに、側面がやけに細い。
体重が昨日よりさらに10kgほど軽くなっていた。

三日目

昨日気づいた異変がニュースで流れていた。
どうやら、この異変は世界中で起きているらしい。
様々な憶測がそこら中で行き交うが、確かなものは
何一つ無かった。我々の不安は募るばかり。
体重は、もう30kgになってしまった。

四日目

朝、起きるのがダルい。この日は外出をやめ、
ずっと家に居ることにした。食欲はあまりなく、
ほとんどずっとベッドの中にいた。
もはや体重計に乗るのは怖かったので、
体重を量るのをやめた。

五日目

朝、とりあえず目を覚ます。しかし、体が動かない。
どうやら自分の体は、平面に近くなってしまったみたいだ。
これから自分はどうなってしまうのかを少し考えたが、
面倒になり、考えるのをやめた。

六日目

もう目を開ける事すら出来ない。自分が今、果たして、
生きているのか、それとも死んでいるのかさえわからない。
もはや全てがどうでも良く感じられたので、何も考えずに居た。

七日目

消滅。

セット

月曜
またいつもの退屈な1週間が始まった。いつもの道、いつもの電車、いつもの授業、いつもの友達、いつもの飯、. . . . . .
ただ今日は何か違和感を覚える。それは、ほんの小さな小さなモノで特に問題にならない様なので、この日は無視することにした。

火曜
この日もいつもの部活の朝練がある。このくそ寒い冬に朝早く起きなくてはいけないのは、かなり苦痛である。いつもの練習を終え、いつもの道を、いつもの面子と帰る。 . . .? 何か変だ。昨日の違和感が、少し大きくなってまた襲ってきた。ひどく気分が悪い。風邪でもひいたのだろうか？今日も原因が分からないまま家に帰ることにした。

水曜
体がだるい。体がうまく動いてくれない。まるで油が切れた機械になった気分だ。これは絶対風邪をひいたにちがいない。でも今日は大事な試験のある日だ。しかたがない。行きたくはないが、学校に行くことにした。
　乗り換えのために渋谷を歩いていると、またあの違和感が襲ってきた。そして今日はその原因が分かった。東急百貨店はどこ？そう、渋谷駅の目の前にあるべき東急のビルが忽然と消えていたのだ。ついにおれも頭がおかしくなったようだ。だってそうだろう？渋谷の東急がいきなり消えるか？これは何科に行けばいいんだろう？眼科か？それとも精神科か？どちらにしろ、明日ゆっくり行こう。

　そして、散々な試験結果を残してこの日は終わった。

木曜
この日は全ての授業をキャンセルして、朝から病院に行くことにした。まず眼科に行ってみた。結果は、問題なし。どこにも異常はなかった。やっぱり精神科か。あまり行きたくはないが、そうも言ってられないので精神科デビューを果たすことにした。ところがこの日は定休日。デビューは明日に持ち越しとなった。

金曜
この日は一応学校には行った。午前中に終わり、渋谷を歩くとやはり東急はな

かった。それどころか今日はハチ公まで消えている。なんてこった。こりゃ、ほんとにやばくなってきた。

（あのー。僕頭おかしくなったみたいなんです。）

（どうしたんです？）

（見えるべきものが見えないんです。）

（というと？）

（渋谷の東急のビルが消えてるんです。ハチ公も。）

（は？東急？ハチ公？）

（東急百貨店ですよ。渋谷の前にある。ハチ公も）

（これは治療に時間がかかりそうですね。また明日来てください

（……）

どうやらこの先生も狂っているらしい。

それともやはり俺が狂っているのか？

土曜

ふー。なんだか異常に疲れる１週間だった。ありきたりな言葉だがこの１週間が夢であってほしい。来週の月曜日にはまた、いつもの道を歩き、いつもの電車に乗り、いつもの授業を受け、帰り道にはいつもの様に東急もハチ公もある渋谷で遊ぶ。つまらないけど、そんな毎日の方がいい。

そんなことを考えながら家でボーとしていると、友達から日曜日（明日）の遊びの誘いがやって来た。はっきりいって今、体の調子は最悪だ。ますます体の節々が痛くなり、動く度にギシギシと音を立てる。だが、今の混乱した状態では、仲のいい友達とのおしゃべりだけがいつもの生活（いや、昔の生活か？）との接点の様に思えて、結局承諾してしまった。

日曜

あそび場所はいつものように渋谷ということになった。

（やはり、ハチ公はなくなっていたが）

いつものようにゲームセンターで遊んだ後、いつものように、

いつもの喫茶店でお茶を飲むことにした。

喫茶店に入り、しばらくしゃべっていると、突然

（ カット !!!! ）

あのテレビでおなじみのフレーズが聞こえてきた。

その瞬間、前に座っていた友達が立ち上がり、帰り支度を始めた。

（あれ？もう帰るの？）

そう聞くと

（いや、もう終わったんだ。）

と、言われた。
こいつは何を言っているんだ？そう思いつつ、ふと、窓の外を見ると
見慣れた東京の景色から次々にビルや車や、道路のセットが取り除かれてゆく。
そしてついには何もなくなってしまう。
（それじゃあ、おつかれ！）
そういって、友達は、何もなくなった外へ出て行く。
やがてこの喫茶店のセットも取り除かれ、僕は何もないところに立たされる。
やがて黒い衣装を着た舞台係がやって来て、
（失礼します。）
と言いながら僕の体をバラバラにしていく。
最後に照明係が
（おつかれさまでした。）
と言いながら証明を消すと、あたりは全くの闇になり、何もなくなった。

高橋 祐喜

日記（最後の 7 日分）

2000 年 1 月 20 日木曜日
　今日、通学途中の電車の中で変な生き物を見た。
エイリアンを手がけた H.R. ギーガーも真っ青というくらいの、特撮に出てきそうな怪物だった。不思議なことに、電車の中にいた人は誰もその生き物に驚くことなく、普通に「今日は寒いですねえ」と話し掛ける人さえいた。

2000 年 1 月 21 日金曜日
　昨日電車の中で見かけた謎の生物が、近所のコンビニや大学の構内に現れ、さらには夜のニュースで街頭インタビューまでされていた。一緒にテレビを見ていた父に「あれは何なんだろうね？」と聞くと、父は不思議そうな顔で「普通の人じゃん。」と答えた。

2000 年 1 月 22 日土曜日
　今日は封切りになったばかりの新作映画を見に行った。映画館の中にまたしても例の謎の生物が、しかも何組かのカップルで現れた。壮観だったが、誰もこの異様な光景には目もくれず、映画を食い入るように見るか、いちゃつくかしていた。僕は頭が混乱して、映画どころではなかった。

2000 年 1 月 23 日日曜日
　テレビをつけたら、NHK とテレ東以外の局では、ほとんどの出演者があの生き物になっていた。にもかかわらず、誰もそのことを気にしない。もしかしたら、皆には普通に見えるのかもしれない。特に、みの〇んたまで変わってしまったのは非常に嘆かわしいことだ。

2000 年 1 月 24 日月曜日
　今日は 1 限から授業に出ようと思って朝早く出かけたが、駅前にいた人のほとんどがあの生物になってしまっていたので、すぐに家に引き返して午後から大学に行った。大学でも普通の姿の人は数えるほどしかおらず、授業をしていた教官も変身してしまっていたため、話が聞き取りにくかった。それでも、みんなまだ気付いていないようだ。

2000 年 1 月 25 日火曜日
　今日は外に出る気にならず、一日中家にいた。
ついにうちの家族までもが変身してしまった。
テレビでも普通の人が見つからなくなった。

2000年1月26日水曜日

普通の姿の人間が恋しくなって、昔録ったビデオを見てみたらその中の人も変わっていた。一体この世界はどうなってしまったのだろうか？
もしかしたら僕の頭がおかしくなったのかもしれない。
ま、どっちでも同じ事だけど。
みんなが変わってしまって、自分だけ普通なのも少々気まずい気がするので、変われるものなら早く変わってしまいたいと思う。

一日目：
日本の T 大学の計算機施設での光景である。A さんがメールを交換しあっている。
A :「近ごろ、物事が自分の思い通りにはこばんなあ、今週 1 週間だけでいいから、人間の思い通りにことが運んでくれたらなあ。」
相手:「本当にかなえてやりましょうか? できないことはないですよ。」
A： (どうせ冗談半分だろうと思って)
「それでは今週 1 週間お願いします。ところで、うんぬんかんぬん」
といったとりとめのないメールを送りあっているうちに、当然といえば当然だが、自分から送ったメールの内容はほとんど忘れてしまっている。

二日目：
A さんは大学に行くために、K.I. 線に乗っている。彼はいつものことながら、かなりいらいらして電車に乗っている。今日は特にやかましい。やんちゃそうな女子高生がベラベラ喋っているのだ。それがまたいわゆる「女子高生」のしゃべり方なので、余計に腹が立つ。内心「こいつら、やかましいがきやなあ(注:彼は関西出身です)。うっとうしい通勤者もろとも消えろ。」といったとたん、やかましさが緩んだのであたりをみまわすと、ちょうど半分ぐらい人数が減っていたのだ。彼はすっかり忘れているようだが、まさに冗談「半分」だ。

三日目:
B さんは大の阪神フアンである。あいかわらず一軍阪神は最下位定位置に在住、二軍は優勝、いわゆる「一軍落ち」状態である。それでも彼は、「逆優勝バンザイ」などと、わけのわからんことを言って友だちと喋っている。帰りの電車でとなりのおっさんが読んでいる新聞をちらっと見ると、「阪神一軍優勝!」となっていて、まわりも阪神の優勝のことばかり喋っている。次の日なにがおこることやら。

四日目：
世界中が、地震や異常気象にみまわれた。この結果世界中の通信や交通が麻痺した。

五日目：
人々が復旧を願った結果 (?)、交通と通信手段は、半ば、復旧した。そして T 大学は次の日に授業再開の見通しだ。

六日目：日本の T 大学での授業である。おそらく宇宙関係の授業であろう。
「今日はレポート課題を出します。授業との関連はないので自由に書いてくだ

さい。テーマは、'世界を二日で壊す'というものです。」
可能ならば宿題は当日に出すというものすごい C さんは、例によってこの宿題を当日に提出した。授業終了後 C さんにその内容をきいてみたら、見事に二日で狂うようになっている。

七日目：とあ、、、、＠＆＄　瘤膀囈鱸鈑濯聿纈裃　　瘤膀囮齢纃諷蜩瘤轣蜴關鞜、、、、(実は、ほぼ C さんの書いたとおりに世界が壊れた。詳しく言うと、すでに世界は半ば壊れていたので (四日目、五日目参照)、二日ではなく一日で世界が壊れた、いや壊したと言うべきか? ところで、A さん、私はあなたの思い通り、半分ずつ人間の思いをかなえてきました。これで一週間たちましたが、ゴマンゾクイタダケマシタデショウカ?)

浅田 洋平

人間

１日目
　NASAが人工衛星からの情報を処理している最中に、猛スピードで地球に接近する物体を偶然発見。数日以内に地球に衝突する恐れがあり、早急に調査がすすめられる事になった。なお、混乱を招く恐れがあるため、調査は極秘にすすめられた。

２日目
　昨日の物体は半径10キロの巨大隕石であると判明。地球への衝突はまず間違いない。衝突するのは恐らくアメリカ。そうなれば地球は壊滅的な被害を受けることになる。NASAでは、この大惨事をなんとか回避するための方法を模索中。

３日目
　結局、隕石の軌道を変えるため、地球からミサイルを撃つ事になった。成功したとしても無数の破片が地球全土に降り注ぐ事になるが、現段階ではこの方法しかない。もしこの事が他の国に知れたら、猛反発が起こるだろう。幸い他の国はまだこの緊急事態に気づいていない。

４日目
　隕石の軌道を変えるため、ミサイルが打ち上げられた。予定通り隕石に命中。しかし、本当の悲劇は始まったばかりだった。

５日目
　午後3時、地球全土に隕石が降り注ぐ。全世界から、悲惨な情報が寄せられる。　アメリカが極秘にミサイルを打ち上げていたことも判明し、各国から非難の声が巻き起こる。

６日目
　全世界は依然パニック状態が続く。そんな中、壊滅的被害を受けた＊＊国がアメリカに核爆弾を投下。

７日目
　昨日の爆弾が引き金となり、第三次世界大戦が勃発。人間の歴史にピリオドが打たれた。結局、人間は地球を滅ぼす運命だったのだ……。

第一日。
地球人の中には宇宙人が混じっているという噂を耳にした。そんなことがあるわけはない。ばかなことを言うやつがいるものだ。

第二日。
最近、同僚の織田がおかしくなった。前々から人を見下しているようなやつだったが同僚はおろか、上司にも偉そうな態度をとるようになった。会社での立場というものを考えないのだろうか。会社をやめるつもりなのかもしれない。

第三日。
「宇宙人が地球を狙っている」週刊紙の見出しにこんな記事があった。いかれたやつらが増えてきたようだ。

第四日。
「宇宙人北朝鮮を侵略」今朝の新聞にこんな記事を見つけた。北朝鮮の発表によると、昨日北朝鮮は宇宙人からの攻撃を受け、降伏。宇宙人は自分達のことを「ファルディアン」と名乗っているらしい。北朝鮮のことだ。またろくでもないデマを流して何を考えているのか。こんなことをして何の得があるのだろう。

今日は織田がうれしそうに笑っていた。気持悪い。

第五日。
どうやら北朝鮮が侵略されたのは本当だったらしい。ユーラシア大陸、アフリカ大陸の国々がことごとく彼らの制圧下に置かれてしまったそうだ。明日あたり日本も危ないかもしれない。

織田は今日会社に来なかった。

第六日。
会社で仕事をしていると、織田が遅刻してやってきた。そして、「日本はこれからファルディアンの支配下に入る。無駄な抵抗はやめて我々の指示に従え。」と宣った。外ではがしゃんがしゃんと音がする。窓から外を見ると、電信柱に手足が生えて動いている。どうやらやつらによって改造されていたようだ。テレビでは都庁ビルが巨大ロボットになって破壊のかぎりを尽くしている。この放送は見せしめのためらしい。

どうやら、やつらは地球を占領するために周到な準備をしてきていたようだ。地球人の中に宇宙人がいるという噂は本当だったのだ。

日本が占領され、他の国もアメリカを残して降伏したようだ。アメリカはどうするのだろう。アメリカは地球を救ってくれるのだろうか。

第７日。
アメリカは降伏よりも自決を選んだ。ファルディアンに攻め込まれる前に地球上のあらゆる主要都市に核爆弾を打ち込み、地球は焦土と化した。この話をしている私ももはや地上の人間ではない。

2000年1月31日月曜日
　朝6時半に起きる。パンの朝食をとり、支度をして大学へ向かう。一月もとうとう終わりだ。テストやだなー、と思いつつ家を出る。一月のわりに暖かい。一限から四限まで授業に出て、バイトに行く。中3と高2の子を教えて家へ帰る。夕食をとる。テレビを見て、明日のドイツ語の予習をし、お風呂に入って、寝る。

2000年2月1日火曜日
　いつも通り6時半に起きる。朝食を取り、用意をして大学へ向かう。二月なのにコートを着ると暑いぐらいだ。眠いながらも一限から五限まで出る。その後、九時までテニスをやって、友達と家へ帰る。夕食を食べ、お風呂に入り、疲れたので寝る。

2000年2月2日水曜日
　今日は一限がないのに親に起こされて6時半におきる。ゆっくり朝食を取り、五限のテストのために勉強する。二限がスポーツなので早めに家を出る。コートを着ないで大丈夫だ。少し時間があるので情報棟に寄る。五限まで受けてバイトに行く。十時半頃家に着く。明日は一限だけなので、ゆっくりし、少し勉強をしてからお風呂に入ってねる。

2000年2月3日木曜日
　今日も6時半に起きる。用意して家を出る。セーターを着なくても寒くない。一限だけ受けて、図書館でテスト勉強をする。家に帰って、ジョギングをしてから、夕食をとる。テレビを見て、明日の予習をして、お風呂に入って寝る。

2000年2月4日金曜日
　今日も6時半に起きる。今日は半袖で平気だ。おかしい。ニュースを見ると、火山があちこちで噴火しているらしい。暑いなぁと思いつつ、大学へ向かう。一限から五限まで受ける。家に着いて夕食を食べ、テレビを見て、テスト勉強をする。眠くなったのでお風呂に入って寝る。

2000年2月5日土曜日
　暑くて目が覚める。なにかが起こっている。テレビを見ると、世界中の火山が噴火し、洪水が起こったりしている。眠いので寝る。起きて昼食を食べる。少し勉強をして、バイトに行く。家に帰り、ジョギングをする。夕食を食べ、お風呂に入って寝る。

2000年2月6日日曜日

熱くて眠れない。テレビもつかない！どうしたのだろう？あつい、あつい、あつい！外はいつのまにか火の海だ！あついあついあついあついー……

―太陽が地球に接近。地球は消滅した。―

月曜日

”ガシャン”

何かどでかい機械の主電源を入れた時のような不気味な心地の悪い音で僕は目覚めた。いつもと変わらぬ寒い冬の朝でいつもと変わらぬ見慣れた部屋の光景がそこにあった。音は夢の中のものだったのだろうか。しかし頭の中はそんなことよりもこれからまた始まる単調な一週間に対する憂鬱な気持ちでいっぱいであった。毎朝７時半に起きて、9時から始まる大学の１限に間に合うように急いで家をでる。そして夕方近くまで授業を受け家に帰る。これが僕の決まりきった毎日の生活である。この日も僕は大学で夕方まで授業を受けていた。いつもならそこから友達と晩ご飯を食べに行ったりもするが、あまりそういう気もせずまっすぐ家に帰り、そしてよほど疲れていたのであろうかしばらくするとベッドの上で寝てしまた。

火曜日

前日うたた寝してそのまま朝まで寝てしまったようだが、そんなときによくある不快感は不思議となくかえってくだらないテレビ番組を観たり電話で友達ととるにたらない世間話をしたりして無駄に時間を費やすよりましだったと、一種の壮快な気分にさえなれた。朝食はさほど食べたくなかったが親が食べた方がよいというので一応食べて家を出た。電車はいつもと同様混んでいた。しかし乗客はもう慣れたものできちんと整列乗車するため乗るのに苦労はいらなかった。そして大学に到着し、授業を受けた。教室はいつもより混んでいるように感じられたがそれでも空席は多かった。夕方になり家に帰ると、寝るのには明らかに早い時間だが両親はすでに寝ていた。僕はまだ夕食を食べていなかったが特別腹がへっていたわけでもなかったので起こさないことにして、そして僕も寝た。

水曜日

朝起きてみると両親はすでに起きていた。姉は会社に泊まったということで、家にはいなかった。特別両親とも会話せずに僕は家を出た。別に仲が悪いわけではなく、話す話題があまりないし、そもそも何か話したいという気持ちがあまりしなかったのである。大学でも僕はあまり口を開かなかった。友達と軽い挨拶を交わす程度であった。自分では気づかないがどこか体の調子でも悪いのだろうか。そういえば最近ろくに食事もとっていない。そう思って僕はカロリーメイトを一箱買って昼食として食べた。さほど満腹感は得られなかったが栄養はとれたのだろう。それで十分である。家に帰ると両親はまた寝ていた。姉は今日も会社に泊まるらしい。

木曜日
　今日は両親も会社に泊まるらしい。そんなに仕事が忙しいのだろうか。しかしとがめる理由も無いだろうと思い、僕はそのわけについて何も聞かなかった。大学では僕はやはり無口だったが周りの人間も明らかに無口になっていることがわかった。ふと考えると最近の僕の生活はいつもにも増して単調になりつつあると思った。しかしたまにはそんなこともあるだろう。そして授業が終わった。家に帰ろうかと思ったが、良く考えてみると家に帰っても寝るだけだしどうせ翌日また大学に来るのだから帰ってもただ非効率なだけだと気づいた。そこで僕は駒場寮に泊まることにした。寝るだけなのだからどちらも大差ないだろう。

金曜日
　なにせ駒場寮は大学の構内に在るのだから、この日は授業の始まる直前まで寝ていられた。時間を効率的に使えてとても満足だった。大学の教室はなぜか混んでいたが皆整然と前からつめて座っているため空席を見つけるのは楽であった。しかし僕は一番後ろの席についたりはせず、やはりつめて座った。そうした方が気持ちがよいのである。昼食はやはりカロリーメイトで短時間のうちにすませた。夕方授業が終わって帰ろうとしたが、周りの人間は帰り支度をしている者の方が少なかった。どうやら大学に泊まるつもりらしい。確かにその方が効率的である。大学の教室なのに泊まってしまってよいのだろうかとか、翌日が土曜日であるとかいったことは一切考えずに僕は大学に泊まった。

土曜日
　僕は大学で目を覚ました。本来なら土曜日に授業はないはずだが教室はやはり整然と前から埋まっていった。僕はなんの疑いも抱かずやはり前からつめて座った。やがて教室は空席が無くなるまで埋まった。しかし立ち見がいないことを考えると。どうやら席の数と全く同数の学生がいるらしい。しかし教室内は騒がしくなかった。なぜなら誰もが無言であったから。皆も僕と同じような生活を送っているらしい。

日曜日
　この日も大学で寝た。もう何の感情も無かった。友達と遊びたいとか、親と会いたいとか、そういう事は一切考えないようになっていた。ただ単純に、学ぶ、食う、寝るを繰り返した。全く効率的な生活だ。

　まるで何かどでかい機械の一部品になったかのような…

月曜日、朝。私の一週間はクロワッサンとカフェ・オ・レで幕を開ける。新聞のページをめくると、今週の日曜日に、ヒューストンからNASAの人工衛星が打ち上げられるという記事が目に入った。明日提出の、人間行動基礎論の課題を考える。人間を催眠術にかけるコンピューターグラフィックスの研究についてだ。我ながらよいできである。

火曜日。今日はコンピューターに詳しい友人に、ハッキングのやり方を教えてもらう。やり方は複雑だが、一度覚えてしまえば何と言うことはない。彼の手にかかれば、国内・海外を問わず、全てのコンピューターに侵入可能だ。そして、いまや私も彼と同等のハッキング能力がある。やはり、持つべきものは友である。かわりに基礎論の課題を教える。彼も、私の回答の精度の高さに驚嘆していた。

水曜日。昨日身につけた技術で、とある企業のコンピューターに不正アクセスしてみる。結果は成功。企業秘密をばっちり盗んだ。どうやらこの会社、明日にどえらい発見を発表するらしい。となれば、当然、株価は急上昇するだろう。私は全財産をはたいてその会社の株を買い占めた。

木曜日。予想通り、新聞の経済面には、例の会社の発明がでかでかと載っていた。株価は急上昇。私は笑いが止まらなかった。基礎論のレポートを教官に提出する。教官も、あまりのできのよさにびっくり。NASAのコンピューターに侵入する。どうやら日曜の人工衛星、極秘のうちに核ミサイルを廃棄するという役目があるようだ。打ち上げには、細心の注意が払われるようだ。

金曜日。相変わらず、株価は急騰中である。基礎論のレポートは非常にいいできだ。クラスの奴に見せたら、本当に催眠術にかかってしまった。人工衛星にも核が積み込まれたらしい。これを知っているのは日本で自分だけかと思うと、なんだかワクワクしてくる。

土曜日。私はこれまでと同じように、新聞の経済欄を開いた。昨日までは、例の会社の業績が絶賛されていた。しかし、今日ばかりは違った。例の発見は、甚大な環境汚染を引き起こす物質を発生させてしまうことが明らかになったのだ。全財産をつぎ込んだ株には、紙くず同然の値がつけられていた。私は、しばらくの間、事態が飲み込めなかった。時間が経って、ことの重大さが分かってくると、計り知れない絶望感に包まれた。身寄りの無い私には、もはや生活のあては無かった。

日曜日。私は、完全に壊れてしまった。そして、ある決断をした。それは、「自

殺」である。しかし、一人で死ぬのは寂しい。どうせなら、世界中を巻き込んでしまえ。普通なら、世界中の人間を死に至らしめるのは不可能だろう。しかし、私には、ある方法が頭に浮かんだ。NASA のコンピューターに忍び込む。案の定、人工衛星の打ち上げが、秒読み段階に入っていた。ここで私は、人生最大の — そして人生最後の — 賭けにでた。この前の、基礎論のレポートである。あれを、NASA の発射係に見せてやった。結果は、. . . 成功だった。彼は、決して押してはならないボタンを、押したのだった。ロケットは轟音を立てて空へと飛び上がり、猛スピードで、地面に激突した。その瞬間、核が爆発した。世界は、完全に、破壊された。

第１日目（１／１）
　２０００年の元旦、それ以外は例年の正月となんらかわりはない。朝、テレビをつけるとどのチャンネルも特別番組ばかりであったが、そういうのをみる気にもなれずニュースをみた。今日の天気は全国的に晴れ、気温はまったく平年並みで、いい初もうでびよりになるそうだ。別になにをするわけでもなく一日を漫然とすごした。天気は全く予報の通りで寒かった。ただ夜のニュースでは、アフリカのサハラ砂漠で雨が大量に降ったことを大々的に報じていた。べつにたいして気にせず床に就いた。

第２日目（１／２）
　今日は一日雨。砂漠ではまだあめが降っているそうだ。しかも、こんどは南極の気温が観測史上最高の気温を記録したそうだ。そのぶん赤道付近の気温がさがっている。これは、もうただごとではないとおもいきや、テレビは今までのような正月番組を放送していてあまり大騒ぎはしていない。そんなもんなのかなとおもって床に就く。

第３日目（１／３）
　あいからわず世界的な異常気象はつづいている。いい加減テレビその他のメディアも正月呆けからさめて、専門家だの有識者だのがテレビにでてこのじたいを解説しようとしていたが、だれもはっきりと原因をくちにできない。結局わからないのだろう。

第４日目
　きょうは、テレビでおもしろいことをいっていた。この異常気象にもかかわらず地球全体の降水量や気温の平均は、前と全くかわっていないそうだ。結局それらの配分がめちゃくちゃになっているだけだというのだ。原因は不明。そうこういっているうちに日本も冬だというのに30度にまできおんがあがった。

第５日目
　南極、北極の氷がとけはじめている。海の水位はどんどんあがっている。もう地球はめちゃくちゃだ。

第６日目
　あいかわらず せかいじゅうがだいこんらんである。

第７日目
　もう正確な情報をえるのも困難なじょうきょうだが、この一週間、一見世界の気候はなんの法則もなくただ混乱してたわけではなく、世界中のどの地域も